

〈目的〉現在、食生活を取りまく環境が大きく変化し、食の価値観が多様化してきている。このような状況のなかで、健康な生活を営むための望ましい食事のあり方を考察するために、食生活の実態・意識について調査を行い、世代による違いを比較するとともに、食事満足度におよぼす要因の分析を行った。

〈方法〉対象は、山口女子大学在学学生688人とその母親688人である。回収率は学生76.7% 母親79.4%であった。調査は1990年6月から7月の時期に、質問紙による自己記入法によって行った。データ処理は山口大学情報処理センター山口分室にて、九州大学大型計算機センターのspssx統計パッケージを使用して行った。

〈結果〉1. 食品摂取状況のよい者は「栄養バランスに気をつける」や「料理に時間をかける」などの傾向が学生、母親ともに認められた。2. 食生活に対する意識について、学生と母親とを比較すると「食事に満足している」や「献立に変化をつける」などに有意差が認められた。全般的に母親の方が意識が高い傾向にあった。3. 食事満足度の分析、母親の食事満足度と全質問項目との χ^2 検定を行い、有意差の認められた項目のうち、食生活状況、健康、家族、経済、基本属性の枠組みから12要因を選定した。12要因が食事満足度にどのように影響しているかを明らかにするために数量化Ⅰ類により分析を行った。その結果、「家族と一緒に食事をする」、「家族内の人間関係がよい」および「食事の雰囲気づくりに気を配っている」などが食事満足度を高める主要な要因であった。